JAIST Repository
https://dspace.jaist.ac.jp/

Title	まいちょこ開発物語 ： 伝統工芸の技を融合させた大人の携帯おちょこセット、誕生
Author(s)	
Citation	JAIST社会イノベーション・シリーズ３，35
Issue Date	2010-02
Type	Others
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/8846
Rights	
Description	

JAIST
JAPAN
ADVANCED INSTITUTE OF
SCIENCE AND TECHNOLOGY

Japan Advanced Institute of Science and Technology

今後の展望

現在のバージョンのまいちょこの上代は 30,000 円となっていますが、佐久間さんはこれを 10,000 円程度に抑えたバージョンの開発も構想中です。もちろん買いやすい価格帯のものだからといって、各工程の質を下げていいということではありません。価格と質とのバランスが重要だと佐久間さんは言います。「価格の選択肢があることで、消費者への訴求効果が高まることを期待しています」と佐久間さん。今後の進展が楽しみですね。

まいちょこに関するお問い合わせは（株）満る文（まるぶん）まで
TEL：0761-57-0172
E-mail：marubun@tvk.ne.jp

コラム

九谷陶芸村

九谷陶芸村は、上絵付けや器づくりの体験を楽しむことができる九谷焼陶芸館のほか、16 の九谷焼卸問屋のショールームが軒を並べるショッピングモール、九谷焼の名作を展示する九谷焼資料館、九谷焼美術館（浅蔵五十吉美術館）などが集まる施設です。九谷焼資料館にはまいちょこも展示されています。

住所：〒923-1111　石川県能美市泉台町南 22
TEL：0761-58-6102（九谷陶芸村九谷焼団地協同組合）
九谷陶芸村ホームページ：http://www.hitwave.or.jp/kutani/
九谷焼資料館ホームページ：http://www.kutaniyaki.or.jp/
九谷焼陶芸館スタッフブログ
くーちゃん日記：http://63000286.blog11.fc2.com/

九谷焼資料館

地域再生人材創出拠点の形成プログラムとは

石川伝統工芸イノベータ養成ユニット事業は文部科学省・科学技術振興調整費の地域再生人材創出拠点の形成プログラムにより運営されています。同プログラムは大学の個性・特色を活かし、地域産業の活性化や地域社会のニーズの解決に向け、地元で活躍し、地域の活性化に貢献し得る人材を育成することを目的として、平成 18 年度に創設されました。大学が地元の自治体と連携し、科学技術を活用して地域に貢献する人材を育成する「地域の知の拠点」を形成するシステムを構築することを支援する仕組みです。

JAIST 社会イノベーション・シリーズ 3

発　行　2010 年 2 月

発行所　国立大学法人 北陸先端科学技術大学院大学・地域・イノベーション研究センター
〒923-1292　石川県能美市旭台 1-1　知識科学研究科棟 II 7 階

■本誌に関するご意見、お問い合わせ
TEL：0761-51-1839　FAX：0761-51-1767　E-mail：dento-secr@jaist.ac.jp

本誌は、文部科学省科学技術振興調整費地域再生人材創出拠点の形成プログラムの助成を得て発行しております。

JAIST
JAPAN ADVANCED INSTITUTE OF SCIENCE AND TECHNOLOGY 1990
北陸先端科学技術大学院大学

JAIST SOCIAL INNOVATION SERIES
社会イノベーション・シリーズ 3

まいちょこ開発物語

伝統工芸の技を融合させた大人の携帯おちょこセット、誕生！

マイバッグ、マイ箸など、「マイ○○」がエコなライフスタイルの代名詞になっている一方、好みのアイテムを常に身につけていたいという大人の遊び心を満たす「マイ○○」も続々誕生しています。
「まいちょこ」は、能美市九谷焼陶芸館の技術主任であり、JAIST が開講する「石川伝統工芸イノベータ養成ユニット」の 2 期生の佐久間忍さんがプロデュースした携帯おちょこセット。持ち歩いても飾っても愉しめるアイテムとして、2009 年秋の東京インターナショナル・ギフト・ショーでも注目を集めました。

No.35

はじまりは「石川伝統工芸イノベータ養成ユニット」

九谷焼は能美市、特に市町村合併前の旧寺井町地区の伝統工芸として知られています。新能美市では住民全体が九谷焼をまちの文化であると考えており、九谷焼を活かしたまちづくり・地域 PR も積極的に進められています。佐久間忍さん自身も能美市出身で、町民の約 4 割が九谷焼関連の仕事に従事している地域に生まれ育ちました。佐久間さんは大学を卒業後、能美市の九谷陶芸村内に中にある石川県立九谷焼技術研修所で九谷焼の技術を学びます。その後、JICA の青年海外協力隊員としてアフリカで 2 年間、陶芸の技術指導に携わった経験を経て、九谷焼陶芸館の技術スタッフを務めるようになりました。

技術研究や技術指導、そして自らの作品制作に余念がなかった佐久間さんですが、JAIST が開講する社会人コース「石川伝統工芸イノベータ養成ユニット」を通して、新商品開発というこれまで経験したことのないタスクに携わることになります。このユニットは、伝統工芸を軸にして地域再生への取り組みができる人材の養成を目的に実施されているもので、九谷焼をはじめ、山中漆器、輪島塗、金沢仏壇など地元の伝統産業に従事する商人・職人が参加しています。ユニットの一環で行われている「商品開発実践プロジェクト」では、ディレクターのアドバイスを受けながら、受講生自身が企画提案した商材の開発を進めます。

異業種コラボで生まれたまいちょこ

「新商品開発と聞いて念頭に浮かんだのは、伝統工芸の高度な技を組み合わせた商品を作ろうということでした」と語る佐久間さん。その大きな夢は、手のひらに乗る小さなまいちょこに凝縮されました。

まいちょこのコンセプトは、洗練された茶の湯文化、特に茶碗や棗（なつめ）、茶杓などの茶道具を一式収めて野点（のだて）や旅先に携えていく「茶籠」にヒントを得たものです。茶籠は通常、竹や藤で編まれ、内部に収納する道具にはそれぞれ破損を防ぐため、「仕覆（しふく）」と呼ばれる袋が着せられています。一方、まいちょこは、九谷焼のおちょこを、山中漆器の木地、仕覆、組み紐からなるコンパクトなおちょこ入れに収めるデザインとなっています。

おちょこは、古九谷に特徴的な華麗な色使いと大胆な図柄から、軽やかでモダンな作風まで、バリエーション豊富に揃えます。木地の制作は加賀市の木地轆轤挽き（きじろくろびき）の工房「たにてる工芸」の谷口龍人さん、天平さん兄弟が手がけ、漆職人の山谷尚敏さんが漆を施しました。縮緬地（ちりめんじ）や帯地などの仕覆の縫製を手がけているのは、金沢市竪町でアパレル店を営む MAGIC の木戸口智一さんです。本格的な和裁に関しては専門外だったため、仕覆については新たに技術を学びました。谷口さん兄弟と木戸口さんはユニットの受講生仲間です。

組み紐については小松市在住の組み紐作家の協力を得ました。仕覆に用いられる裂（きれ）と組み紐の色味の組み合わせに創意を凝らすとともに、組み紐の美しい結び方にもこだわりました。

まいちょこと佐久間忍さん

まいちょこ制作風景

まいちょこ、誰がどう使う？

まいちょこの販売ターゲットは富裕層の男性に絞り込んでいます。具体的に描いたターゲット像は、都市部近郊に住み、伊勢丹メンズ館に足しげく通うようなトレンドに敏感な 40 代後半～ 50 代前半の男性。日本酒にも含蓄があり、毎年新酒を楽しむ金銭的、精神的余裕がある人々です。プロジェクトでは、ターゲット層の価値観にフィットし、酒の席で話題になるようなストーリー性のある携帯用おちょこセットというこれまでにない商品を実現させるため、何度となく試作品の制作と検討を重ねました。当初の商品企画は、九谷焼のおちょこを山中漆器の蓋付きのケースに収納するというものでしたが、デザイナーのアドバイスを得て、現在のかたちに進化しました。

デザイン面と機能面を両立させるため、さまざまな工夫も凝らされています。たとえばデザイン面では、木地と仕覆を接着させるのではなく、2 つの部分に分かれるようにしたことで、木地がもうひとつの酒器としても使えるようにしました。機能面では、おちょこを収納することによって木地の内側に傷がつかないよう、おちょこの底面にガラス質の釉薬を塗るなどして工夫しています。

仕覆・組み紐、ちょこ、木地

販売体制づくりと販路開拓に向けて

2009 年 9 月、佐久間さんを含めた商品開発実践プロジェクトの受講生は、入場者数約 20 万人、出展企業数約 2200 社と、国際的にも最大級の商品展示会である東京インターナショナル・ギフト・ショーに出展しました。ギフト・ショーは、受講生が開発した商品の販路開拓に向けた演習の場であるとともに、商品開発実践プロジェクトの成果報告会の場でもあります。佐久間さんは商品展示を行うだけでなく、九谷焼制作の実演も行い、注目を集めました。当初ターゲットとしていた男性だけでなく、女性客の反応が良く、「かわいい」などの声が聞こえたといいます。画廊やクラフトショップ、一流料亭などと商談する機会を持つこともできました。

もちろん佐久間さんにとってはギフト・ショーがゴールではありません。商品自体にさらにブラッシュアップしたい点がいくつかあります。まず仕覆に石川県を代表する伝統工芸である加賀友禅を使うことで、さらに付加価値が高い商品を作りあげたいといいます。

販売面では、販売体制づくりと販路開拓という課題があります。現実問題として作り手である佐久間さんが販売まで手がけることは難しいため、まいちょこの販売面に関しては、ユニットに参加し、同じ九谷陶芸村内に店舗を構える商社（株）満る文が協力することになりました。同時に商品に相応しいパッケージの開発も急いでいます。

「伝統工芸の作り手は、作品づくりや技術の深堀りにのめりこみ、生活に入り込むことを考えない傾向にあります。自分にもそんな部分がありましたが、ユニットに参加してさまざまな人に知り合ったことが、ものづくりについて改めて考える良い機会になりました」と佐久間さん。ライフスタイルや市場の変化により、九谷焼に限らず伝統工芸産業は縮小の一途をたどっていますが、伝統工芸の未来を拓くためには、「生活の中に入り込んでいける道具にするためにはどうすればいいか、作り手自身も常に考えていく必要があります」と語ってくれました。

MY CHOCO FOR YOUR PLEASANT TIME